

技あり!

旭川発の農業機械

— 1 —

大根を葉付きのまま洗える大根洗浄機を10年前に開発し、一躍全国の農業用機械メーカーに成長した「エフ・イー」(旭川)。

次に選果場で使う選別機を造ったが、佐々木通彦社長(57)には胸につかえる思いがあった。「Sサイズに満たない小さな野菜を捨てたくない」。選別機で大量に弾かれる規格外の野菜を救おうと2009年に開発したのが「根菜類自動皮むき装置」だった。

1ミリ単位で薄く

特許も同年に取得した自動皮むき装置はジャガイモ、里芋、ニンジン、大根の皮を1ミリ単位で薄くむく。用途に応じて水が出ない乾式と水洗式が選べ、ジャガイモなら1時間で500kg分をこなす。1台850万円と高額だが、給食センターへ

根菜類自動皮むき機



根菜類自動皮むき装置。右下白枠内は装置内部。刃のない回転ドラムでジャガイモの皮をむく (伊丹恒撮影)

エフ・イー

穴開いたドラムが回転

納入する加工業者などに12台が売れた。特徴は刃を使わず「穴」で皮をむく仕組みだ。無

ね、16角形までできてやっ

数の穴の開いた2本のドラムが高速回転し、その上をイモが行ったり来たり跳ねながら、気が付くと皮がむけていく。ドラムは丸形と16角形。当初は8角形で作ったが、イ

モが飛び過ぎて肝心な皮がむけず失敗。再度、10角形、12角形と試作を重ね、1983年頃から

「産地をつくる」

同社が農業用機械を造るようになったのは入社した1983年頃から。

「農家の所得向上につながるれば」と農業用機械を造り続けてきた佐々木社長。「根菜類自動皮む

ウやサツマイモ洗浄機、さらにジャガイモを薄くむく小型の「薄むき名人」(85万円)などを次々と開発。薄むき名人は道の駅やレストランで使われている。

佐々木鉄工所として創業した父通彦さん(故人)は木材用機械を造り、60年代後半には25人の従業員を養っていたが、75年を過ぎると木材業界の不況のあおりをまともに受けて経営難に陥り83年、会社に残っていたのは父母2人。「どうしたら会社が忙しくなるだろうか」。いつもそう考えながら、全国で一年中作られている農産物を探し歩いた。それが大根だった。通彦さんが亡くなった91年、社名を鉄の元素記号「Fe」を文字でエフ・イーに変更。以来、9つの特許を取得し、ゴボ

き装置」で今年2月には経済産業省などの第4回ものづくり日本大賞で優秀賞を受賞した。「小さな会社でも、お客の声を聞き、良いものを造れば市場ができる。機械が産地をつくるんだ」。旭川機械金属工業振興会の会長としても業界を引っ張り、挑戦は続く。

ものづくりが盛んな旭川には、ユニークな農業関連機器を発明してきた中小企業がある。会社の奮闘ぶりを交え、こうした機械を紹介します。(久保吉史が担当し、4回連載します)